

序 未分化の知識人

特集 I 新しい文化運動よおこれ

芸術運動の立脚点 / 管 孝 行 8

サークル運動の可能性 / 大沢真一郎 18

■サークル論叢

五月祭の映画づくり / 映画 / 22 / 早大・京大で合同公演を / 演劇 / 24 /
 学生新聞の懸賞小説 / 文学 / 26 / 大学新聞のお台所 / 新聞 / 28 / 民放に
 フラれたドラマ / 放送 / 30 / ブロック会議で起死回生? / 総合 / 32

現代詩の倫理 / 天沢退二郎 62

大学からの手紙

- 沖繩へ本を送る運動 / 東京女子大学 / 4
- 第二自治会設置のうごき / 早稲田大学 / 5
- 塾長の“政治活動禁止宣言” / 慶応大学 / 6

■ 随 筆

ほかならない / 進藤 純孝 50

ぼ や く / 辻 理 70

■ ルポ・原点に生きる / 1 / 吉川 徹 72

思想的“安定”期に 十年めをむかえた法政大学の学生調査から 88

■ 学生を斬る 打算的か非打算的か / 市原豊太 59

■ 創作 故郷東京 / 柘植光彦 134

■ 学生の衝 / 1 / 本郷 130

■ 漫 画 ああ全学連組・国会飯場 / 紫藤甲子男 34

■ FOR EDITOR 井手文子 / 副田宗夫 / 関美智子 2

■ 詩 ぼくたち陽射の中に / 渡辺武信 44

たまたまの恢復律 / 岡田隆彦 46

■ 留学生の手記 パスカルの肖像 / 広田昌義 52

特 集 Ⅱ 就 職 を 考 え る

ビロードの椅子は転向か / 尾崎盛光 92

現代学生の職業観 / 後藤総一郎 94

■ 就職を考える 大田勝 / 木島哲史 100 ■ 就職 63 102

■ 企業研究 高島屋 105 / 本田技研工業 109 / 三菱信託銀行 113

/ 住友化学 117 / 富士通信機 121 / 日産自動車 125

■ ほんたな 「技術革新の社会的影響」人文科学会 富永健

「十五年戦争」コーナー・ゼロ / 「日本を考える」 83

■ 映 画 「わんぱく戦争」 「天国と地獄」 「影を斬る」

「夜行列車」ほか・シネ同人 78

特集・自虐的学生論

人生論の墓場か／菅谷規矩雄	12
活動家ジャリトロ論／御堂重高	18
女子大生クールガール論／葛原香子	23
大学下請工場論／高木博義	28

■ 大学からの手紙

意外に好況、異常なしの就職戦線／明治大学	8
またとれぬ“臨時”三年目の学生会館／お茶の水女子大	9
あいつく保守派暴力学生の暴力事件／中央大学	10

均質化された経済生活 十三回めをむかえた東大の経済調査から 58

■ 学生 の 衝 / 2 / 三 田 104

■ 漫 画 おお 歴史がゆく / 柴藤甲子男 72

■ FOR EDITOR 鈴木元彦 / 柏陽太郎 / 有田真智子 6

新 連 載

大学昭和史 / 1 / プロローグ 108

私の大学時代 / 新明正道 108

■ サークル論叢

衣がえする『新思潮』〈文学〉40 「菊坂ゼツル」分裂の背景〈ゼツル〉44

発足した関西演連〈演劇〉42

■ 学生運動 混迷の底からの報告と展望 / 片岡哲也 64

■ ルネ 原点に生きる / 2 / 小平敦子 88

戦後学生演劇史の視点 / 菅孝行 46

■ 海外レポート アメリカの学生運動 / 明石紀雄 52

報告 〈無名〉にむかって歩むこと / 金子万平 84

■ 随筆 零メートル地帯 / 田辺貞之助 50

ぼ や く / 辻 理 103

■ 創作 幻想対話 / 仙波輝之 122

■ 詩 幽霊船 / 西尾和子 36

炎 / 木村 治 38

■ ほんたな 「性的人間」天沢退二郎・「真田風雲録」
大西広・「残虐立法」・コーナー・ゼロ「どつたがえしの時点」 94

■ 映画「シベールの日曜日」夜に終りに」・シネ同人 99

特集1

委託研究

を斬る!

自壊するアカデ
ミズムのとりで

(1)
(2)

東大工学部
Y研究室の記録

私大研究者の記録

大橋宗成
永井勉

35

36

48

データ ■ 国立大学の現状

編集部

54

●サークル論叢

学生小説の可能性 <文 学> 20
期待される連題づくり <海外研究> 24

記事にみる学校気質 <新聞> 22
迫力なき女子大連合展 <写真> 26

新 人生非行少年論 / 篠木 卓

137

●大学からの手紙

くすぶり続ける駒場オリ廃止問題 <東京大学> 8
関西私学授業料闘争の意味 <同志社大学> 9
戦災孤児ととり組んだ一年間 <共立女子大> 11

● ほやく / 辻 理 34

● 漫画 / 安保後四年 / 柴藤甲子男 66

● FOR EDITOR / 本田郁夫 / 滝沢睦男 / 芦野伸之 6

連載

大学昭和史 / 2

昭和の暮あけ

弾圧の風について 72

私の大学時代 / 高野 実 85

特集2 ● ショートショート



135

無礼ボーイ ● 隅 村 修 (『群』) 136

汚れた部屋 ● 松谷 英明 (『早稲田文芸』) 138

合 作 ● 植 木 久 (『新思潮』) 140

あるバイト ● 秦 順 士 (『新思潮』) 142

孤独な彼 ● 田中英道 (『東大文学』) 144

会社まわり ● 佐々木 志 (『不毛』) 146

死神の掟 ● 早川 平 (『新創作』) 148

● 海外 トロツキスト世界を行く / 川戸康暢 89

特集 ■ 就職を考える

● るぼるたあじゅ・新入社員 K君五月の七日間 95

● 企業研究 日産自動車 99 / 富士電機 102 / 住友生命 105

マツキヤンエリクソン博報堂 108 / 住友銀行 111

三和銀行 114 / 三菱電機 117 / 積水化学 120 / ソニー 123

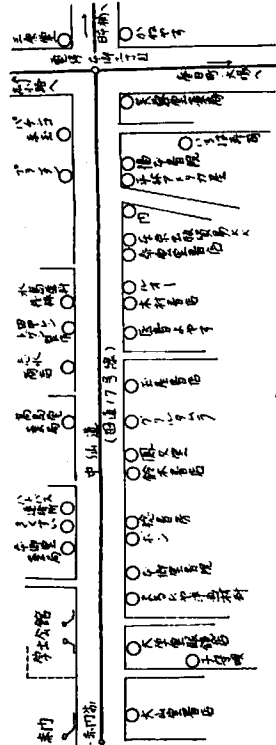
● 詩 半 恋 歌 / 天沢退二郎 28

ひとつの続き / 大崎紀夫 30

● ほんたな 「砂の上の植物群」・「現代の技術者」重松英明

「凶区」・コーナー・ゼロ 「小繋事件」 68

● 映 画 「俺は知らない」「乾いた花」ほか / シネ同人 61



本郷

「本郷もかねやすまでは江戸のうち」かねやすは今も本郷三丁めの電停前にあるから東大のあたりは江戸ではなかったということになる。江戸時代東大一带は、赤門の由来からもわかるように、加賀藩前田家をはじめとする大名屋敷がたなびび、いわゆる山の手だったのだらう。

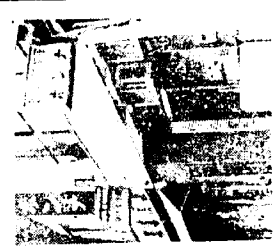
だんだん落ちめになった、それでも気位だけは高かった神田子か「てやんでえ、田舎ぞむれえめ。あんなの江戸じゃねえや」なんてうそぶいているのが目に浮かぶ。

明治十年四月、昌平学校、開成学校、医学校を併せて東京大

学創立。法、文、理、医の四学部のうち法、文、理学部は神田一丁前に校舎があり、当初から本郷にあったのは医学部と病院だけである。明治十七年、法文学部新築校舎が現在の場所に竣工、十八年九月には各学部が移転を完了し、ようやく総合大学の体裁をととのえた。今の「たごの足」が地方大等と同じ状況だったわけ。

明治十八年帝國大学と名が変り、三十年に京都帝大ができるまで、日本で唯一の大学であった。

「非常に静かである。電車の音もしない。赤門の前を通る管の電車は、大学の抗議で小石川を通る事になったと国にいる時分新聞で見たことがある。三四郎池の端にしゃがみながら、不図事件を思い出した。電車さを通さないと言ふ大学は衆議社と離れている」(夏目漱石、「三四郎」と漱石は明治四二



こくのあるコーヒーとクラシック音楽、それに気持のよい店の人たち。東大生にはきわめて人気がある。朝来るのはたいてい一人。静かにコーヒーを味わう。午後は教人一語がほとんど。空間の話、旅行の話、麻雀の話。そして夜、また一人客の時間。本を読む者、ノートを写す者。いつも、それぞれに居心地よく、他店にはけして入らぬ、というフロンを多く持っている。

コーヒード ボン十

年に書いている。「野々宮君の先生の何とかと云う人が、学生の時空馬に乗って、此馬を乗り廻すうちに、馬が云う事を聞かないで、意地悪くわざと木の下を通るので、帽子が松の枝に引っかかる。下駄の綱が踵に挟まる。先生は大変困っていると、正門前の喜多床と云う髮結床の職人が大勢出て来て、面白かつて笑っていたそうである」(「三四郎」)のんびりした時代だ。

電車の話はまだある。「早速本郷へ出かけた。竹早町から本郷三丁目まで生れてはじめて電車というものに乗った。そして三丁目から大学の方へ歩いた。この辺は電車はなく、左右ともに小さい店で、ミッツという運動具店だけが、大きかった。この辺で彼は角帽を買った。イヤリス製ランシャの上等で作ったもの。二円五十銭が三円であった」(大内兵衛「兵衛の

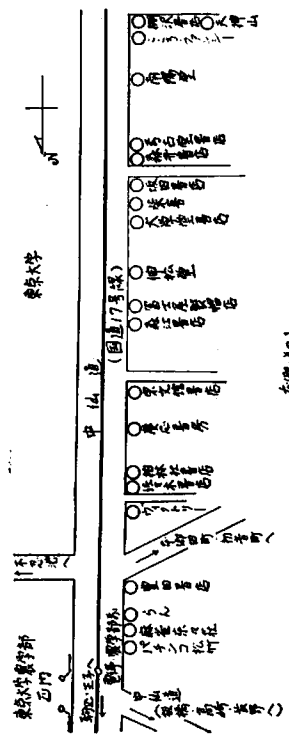
上兵」)
現在東大の前の通り(近ごろ本郷通りという)には、王子から八重州通三丁目へ行く十九番の都電が走っているが、これが敷設される時が大変だった。大正七年ころとどきくが、東大地震研究所では観測ができなくなる。と美城原植岡に広大な代替地をもらったという。

今も正門前にある本屋、郁文堂が店開きしたのが明治三年

大学の敷地内にくいこんで店があったそうだ。大学が膨張するにつれて反対側に追い出され、そういえば大学とともに発展した商店街も、今は逆にそれが静寂となつて伸びがないという。

市電が通る前の本郷通りは、本郷三丁目から急に道巾が狭くなり、大学の前だけ太く、また細くなつていた。区画整理で現在の太さに。ところがまた、今より十メートル近く道巾を広げる案がでているとのこと。「ビ

屋食時には東大生でいっぱい、一〇〇円のカーレイスと五〇円のコーヒー。それ以上に、どっしりとした絵と彫刻が、そして落ちついた雰囲気か学生を引きつける。数人の小さな会議は必ずといっていいほどここでもたれる。御主人の森田賢氏は衆議院議員、東大に魅せられて二〇年間に書きつけてきた。



ルを建てようとしても許可がおりないんですよ」とは都文芸協副社長で商店連合会長の大井敏夫さん。

「一高が本郷にあった時代が森川町（正門前）のよき時代でしたね。学生と地元がしつかり結びついていて」

今日の本郷の夜は寂しい。学生があまり居ないのだ。目につくのは修学旅行の生徒たち。戦前、数多くあった下宿屋が、戦後軒並旅館に転向してしまった



のだ。文芸区は東京都について旅順が多いとも書いた。乗入下宿もなくなった。いや高くなつて学生では入れなくなった。東大の学生たちの下宿は今、杉並練馬、はては近原にまで及んでいる。したがって夜の本郷には学生が不在。赤門から農学部にかけて、一、二軒おきに並ぶ本屋は店を早くしまふ。通りは暗くなり、一般商店もやむなくしまいが早い。

学生がいなくて、賢はしまらぬ本郷の街、その今と昔、昔を想いつを今を歩くと。本郷三丁目、かねやすの向いが大学もなかの三原堂。江知勝は昔この東西に二軒あったが、今は春木町側の一軒だけ。菊坂へ下る角には、燕楽軒という西洋料理店があり、久米

いろは 寿司

戦前のコンパといえは、豊岡だの江知勝たのですきやきというわけだったが、あるものはすでになく、あるものは高級になりすぎて学生には近づけない。かわつてよく利用されているのがいろは寿司。うなぎとすしとの二枚かんぱんだが、いきがよゆうまいので好評。コンパも近ごろは、クオア玉杯に代つていつでも夢をクからクインタークまで、剣舞に代つてツイスト、はてはリンボーダンスと、しかし昔も今も騒々しいのは同じのようだ。

正雄などが出入りしていたそう。赤門と正門の間にあつた鉢の木食堂と共に当時のシャレた人種が集つたという。今は米軍放出品の靴店となつているが、燕楽軒となる前は勤工場といつて、一種のマーケットだつたそうだから元へ戻つたともいえる。このそばにあるのがいまやコンパだけなわのいろは寿司。さらに北へ行くところ、そしてグリルタムラ。通りの大学側で学士会館の南にあるのが本郷駅向の隣に有名な青木堂があつた。『三四郎』の広田先生のモデルといわれた一高の岩本先生が、やはり一人静かに居つていたとのことだが、昭和十一年一高が駒場に移つてから次第にさびれて、戦後はなくなつてしまつた。

赤門から少し行つた所に落着標丁がある。そのむかし、カフェへ通うおしゃれな東大生、ロマンスも多かつたらしい。こ

こに入りびたると落着るといふのでこの名があるとか。今は大倉屋、梅春司、やぶ瓶などが学生相手に商売している。

喫茶店は正門前に四軒、赤門から本郷三丁目めにかけて四軒、農学部前に一軒とあるが、学生が主に入るのは正門前のボンナとコロンビア、それに農学部のらん。構内に生協緑蔭のメトロとアイトコーヒルがあり若干安いのでたいへんだ。それぞれ特色があつて、メトロは文芸部、アイトコーヒルは理工医学部の白衣が自立つ。コロンビアとボンナも音楽がボビエラーとクラシックの趣いもあつてそれぞれ固定したファンを持つている。

遊びはやはりマリヤン。付近に五軒あるが正門前都文堂となりのかいこいしが常に混んでいゝ。場所のせいだが、一流マリヤンでこの学生がやつている。パチンコも三軒あるが出が悪いとのこと。学生はあまり見

かけない。映画館は昔、本郷座とがいうのがあつたそうだが今はない。

こう見てくると、同じ学生の街でありながら、早稲田一带の活気はぜんぜん感じられない。正門前、柳沢書店の御主人は云う。

「昔はね、本を買いに来る学生さんはしきりに何学部だとわかつてしまつたものだが、よく出入りしてくれましたよ。休みに本を持ってきてね、おやし

これ預つてくれ」つてんですね『寮に置いてとくとなくなるからな。ただしただしやないぞ。帰省の汽車賣だしてくれ』なんてね。またコンパ、そのころ五十銭だつたけど、そのたびに本を持ってきて費用のたてかえをさせられたり「おやし、おやしつて親しまれたけど、今の学生さんとはいなじみが薄くなつてしまつてね」

初夏の学生街は、コンパ、コンパでややの活気をみせている。

グリルタムラ・グリルタムラ・グリルタムラ・グリルタムラ

赤門と本郷三丁目の間にある高級レストラン。学生よりも教授連が多い。最近では四〇人までいれる宴会場もでき、メニュー以外の料理も注文すればなんでもできるのが「自慢学生の街」といふより「大学の街」にまさらしい店。

グリルタムラ・グリルタムラ・グリルタムラ・グリルタムラ